

見続けること

竹村良訓 — 陶芸家／修復家

『愛の無常について』 亀井勝一郎



最初に手にした19歳の頃から、既にほぼ同じだけの時間が経っている事に我ながら驚きました。

読んで心に掛かる本は折々に何度も読み返しますが、この一冊にも、再読を重ねることで、以前は読み過ぎてしまっていた箇所や、より理解の深まる部分を未だに発見しています。

こちらが歳を重ね、微かながら経験を得ていくと共に、その本の持つ意味合いの深さに少しずつ気づいていく。さらには、紙の面という鏡を通じて、自分との対峙と内省をも同時に促される。怠惰ではないか、思考を停止させていないか、覗けばいつだって鋭く磨がれていて此方の言い訳を許さない、時にそういう本に出会う事があります。

発刊は1949年。実に70年前の本ですが、初めて読んだ20年程前「まさに現代の事、そして自分の心奥についてが書かれている」と感じ、今も読めば尚更にそう気付かされます。

明治に生まれ、大正に少〜青年期を過ごし、昭和の戦前戦後という激動の時代を生き抜いた著者の、片時も人間の織り成す業から背けずにいた眼差しと、その透徹した理性によって綴られる一篇一句に、読む毎に身が引き締まってしまいます。

さらに様々な引用をあげつつ、常に著者自身の体験に基づいた独白としても語られる文章は、卓越した場所から投げかけるのではなく、共に悩み苦しむ伴走者の目線で書かれています。

自分はものづくりの仕事をしています。本書には（また同氏の他書にもですが）美術・文芸についての示唆を得る所も多く、そちらの興味からも参考になる一冊です。

さて題名からも予感され、序文にもあるとおり、いわゆる安易な「救い」や「解決」を終始こちらへ寄せこない内容には、気晴らしにもならず、自己弁護とも採れず、読み進めるほど延々と心苦しいばかりなのですが、打ちつけるような徹底した現実認識の果てに、むしろ一粒の希望を与えられるようです。

いや、そのたった一粒の希望さえ、生半に生きてはきつと覚束ない、と本書は厳しくも言い放ちます。

記された字句の向こうに不断の問いがあり、本を閉じても自問の形をとって念頭を離れません。

自分は端的に「考える事＝生きる事」だと思っていますがその原因の1つが本書ではなかったか。

ともあれ20年間、折に触れ読み返し続ける事で、いつしか自分にとって進行形の不朽の一冊となっていて、この先も「読了する」ということは無い気がしています。

そんな読書体験のきっかけを青年期に持てた事は幸運に思います。👍